

第7回 車座 in 仙台

未来の被災地。それは過去に大きな被害を受けたところも含め、日本全国全てである。震災が起きたらどう避難し、当面の危機を回避するか。地域づくりをどのように進めるか。心災にどのように対応するか。第7回車座・交流会は、東日本大震災から4年目の春を迎え、これまでの3年間、岩手、宮城、福島で復興の地域づくりに取り組んできた皆さんに学び、未来の災害に備えるとともに、東北の美しい未来づくりをさらに加速させるための手法や具体策を議論する場となった。

【日 時】 2014年5月30日（金）～5月31日（土）

【場 所】 宮城県仙台市・東松島市

【共 催】 仙台市・公益財団法人せんだい男女共同参画財団

【参加者】 東北で復興に取り組む現地リーダー 32人、首都圏からの参加者・専門家 16人

【初 日】

11時	仙台駅 集合
11時半～	仙台市内津波被災地域訪問 ・津波被害を受けたキリンビール仙台工場見学 ・南蒲生地区の女性たちとの懇談 (被災体験やまちづくりなどについて)
15時半～	蒲生干潟の回復状況視察
17時半～	・東北各地の取り組み報告 ・夕食・懇親会

午前11時、参加者が仙台駅に集合。移動中のバスの中では、震災当時、宮城野区長であったせんだい男女共同参画財団理事長 木須八重子さんに、災害対策本部長として初動対応にあたった経験等をお話しいただいた。仙台市は大して被害を受けていないと思われがちであるが、都市の規模が大きいため、人数で見ても、面積で見ても、被害は甚大であったとのこと。

宮城野区沿岸部に位置するキリンビール仙台工場に到着。この工場は、津波でビールタンクが倒壊するなど、大きな被害を受けた。操業が再開できたのは半年後。今回は、当時の被災状況と復興のパネルのご説明を戴き、地域密着の支援活動である「復興応援キリン絆プロジェクト」についてご紹介いただいた。

工場に隣接するビール園で昼食を済ませ、若林区荒浜地区へ。東日本大震災で亡くなられた

方々の追悼と復興の誓いをこめて、地域の方々が建立した「荒浜慈聖観音」。私たちはこの場に赴き、献花を行った。

続けて、宮城野区蒲生にある岡田会館へ。津波被害を受けた南蒲生地区の3名の女性たちから、震災当時



のお話や、震災をきっかけにまちづくりに参画するようになったお話をうかがった。

2011年3月11日14時46分。地震は突然やってくる。1978年に起きた「宮城県沖地震」。近い将来に高い確率で発生すると言われていたため、過去の経験を忘れず、「いつかわからないけど、また来る」ということを覚悟していたそうだ。3・11の地震が来たとき、はじめは「これでようやく来た」、「これで安心できる」と思ったそうである。しかし地震の長さ、強烈さに、次第にそれが、「宮城沖地震」どころではないと実感し、恐怖を感じはじめた、と話した。もう1名の方は、「もう避難所へは戻りたくない」、そう思いながらも、得たもの、再認識したことは大きかったと話す。余震への恐怖、水のバケツリレーのような共同作業、プライバシーの無さ、挙げればたくさん辛いことはあった。しかし、「コミュニティ」、「つながり」の再認識は大きかった。仕事へ行くときはどこからか「いってらっしゃい」、帰ってくれば「おかえりなさい」。そんな家族のような空間と助け合いに、それまで忘れていたことに気づけたと語った。宮城野区七北田川河口に広がる干潟は、シギやサギが飛来する自然と触れ合える場であった。津波によって塩分濃度が変わってしまい、生態系が変化してしまっただが、現在少しずつ取り戻しつつある。海に続く道の途中の風景。門柱やお風呂だけが残っていた。

仙台市内津波被災地域訪問を終え、東松島市へ。夕方からは被災地のリーダーからの報告を中心とした交流会。

「市民と行政の架け橋となるべく、連携事業の特命事業を担当。JKSK、せんだい男女共同参画財団の三者共催で、「東北の美しい未来創造塾」を開講し、復興を担う女性や若者の人材育成にも尽力している（仙台市 白川由利枝さん）」、「キャリアカウンセラーの経験から、震災直後より学生や失業者のキャリア支援を行う。また景観の復興と地域に住む女性たちを中心とした新たなコミュニティづくりを目指し、進行中（未来創造塾 平田千早子さん）」、「東北の復興に向けた社会起業家育成事業の報告。復興の過程で生まれる様々な需要に応える起業家の育成をサポートする（せんだい・みやぎNPOセンター 佐々木秀之さん）」、「奈良で自給自足、心地良い住環境作りを実践している（積水ハウス㈱ はたあきひろさん）」、「企業や学生の就農体験や被災跡地の農業利用、人が通いあう農業を目指す（よつばフ



ーム 熱海和美さん）」、「女性のライフスタイルのあるべき方向性を、ものづくりを通して見ていく fufu プロジェクト。震災の際、物資不足の備えとして布ナプキンの有用性を広めている（fufu プロジェクト 及川奈七見さん）」、「東北発食べもの付き雑誌「東北食べる通信」の編集長（高橋さん）。ルーツが分かる、顔が見える食べものとするため、生産者と生活者を繋ぐ雑誌を制作している。太田さん、相澤さんとともに「東松島食べる通信」を発刊予定（NPO 東北開墾 高橋博之さん、東松島アンテナショップまちなんど 太田将司さん、宮城県漁協矢本支所 相澤太さん）」、「女性のための自由学校を震災後、仙台で発足。食や環境に関することの勉強会を通して、人がつながるコミュニティを目指す（NPO Sendai Lycée 梅津周子さん）」、「震災後、自然栽培の拠点を、長野から実家のある陸前高田に移し、米、蕎麦を中心に自然栽培の基盤づくりに取り組む（自然栽培光香 金野誠一さん）」、その他、過



去に車座・交流会で訪れたいわき市、石巻市、亘理町、南相馬市からの参加者によるその後の活動報告といった、地域密着で独創的かつ意欲的な取り組みも発表され、参加者も大いに勇気付けられた。

【二日目】

8時半～	東松島市訪問 ・ツリーハウス見学 ・よつばファーム ・のり工房矢本
12時～	昼食 げんちゃんハウス
14時～	防災ワークショップ 「みんなのための避難所作り」体験
15時～	車座・交流 ワークショップ
17時半	解散

翌日、恒例となった早朝の散歩会では、伊達政宗公の長女「五郎八姫」、そして伊達政宗公ゆかりの松島の散策を佐藤康子さんのガイドのもと行った。朝8時半には、全員バスに乗り込み、出発。復興のための森作り。その一環で作られたツリーハウスを見学。この木の家を登って、子どもたちは学校へ向かうそうだ。続けて、海苔の名産地大曲浜にあるのり工房 矢本。皇室に献上されるほど、質の高い海苔をつくっている地域である。ここもまた津波の被害を受けた。しかし、それに屈せず大曲浜産の海苔を売り出すために創立された。そして、「よつばファーム」では、いわきオーガニックコットンプロジェクトの苗を定植する体験をした。ここは以前住宅地であったが、津波で流されて



しまった。現在は、その土地を農地に転換して活用している。



午後は、仙台市にあるエル・パーク仙台に移動。まず初めに、せんだい男女共同参画財団と仙台市民から結成されたせんだい防災プロジェクトチームによる「防災ワークショップ～みんなのための避難所作り～」を実施。それぞれが避難所運営委員となった想定で、震災の際に避難所で実際に起きたことをもとに作成した事例について、「どう対応するか」、「どういった配慮が必要なのか」等を主体的に考え、議論した。



続いて後半の車座・交流会ワークショップではテーマに分かれ、リーダーによる問題提起の下で議論を行った。

- テーマⅠ スタディーツーリズム
- テーマⅡ 農業地域の再生
- テーマⅢ 防災ワークショップ
- テーマⅣ わたりグリーンベルトプロジェクト
～100年続く仕組み作り～
- テーマⅤ メンタルヘルス



「何がどう問題なのか」、「関連することは?」、「どういうビジョンや方策が描けるか」など、白熱した議論が展開された。

～車座・交流会ワークショップで挙げた意見やアイデア～

- 本当にケアが必要な人や支援者へのアプローチが必要
- 男性が集まる場（麻雀クラブなど）に出向いてメンタルヘルスの体験会を開く
- 地元の人から声がけしてもらおう（安心して参加できる）
- 子どもたち向け「みんなの図鑑」ワークショップ（紙芝居作り）を実施。亘理の防潮林の歴史、生態系、自然の役割などを紙芝居にしてもらうことで、コミュニケーションが生まれる。
- 今の農業にはアイデアが必要
- 子どもたちの農作業体験（食育）や農コン（農業×コンパ）
- 学童保育として農家で子どもを預かる（畑で遊び、農作物でおかずを一品作って家に帰る）
- 子ども、お父さんも巻き込んだ防災ワークショップを開催する
- 「避難所をつくる」だけでなく、自分たちで「運営する」という意識をもつ
- 避難所の体験談や成功例をまとめる
- 仮設住宅体験（宿泊施設として）
- 原発地域のスタディーツーリズム（自分の町の原発マップ作成、旅行会社とタイアップ）



2日間盛りだくさんの旅程の中、真剣に東北を考える参加者の方々。被災地内外・老若男女関係なく、「どういう街にしていこうか」と青写真を描く。まさに「ともに、前へ」であった。